

北周・武帝期の庾信（二）

—— 保定二—三年 ——

加 藤 國 安
(漢文学研究室)

一 武帝期・保定年間の内政的發展

宰相・宇文護の体制は、着々と強化されていった。保定元年、四月には、歴戦の勇士・尉遲綱^{うゑしこう}を涇州總管・涇州刺史から大司空（Ⅱ土木・産業担当）に昇格させた。尉遲綱といえは、あの孝閔帝弑虐事件の際の、宇文護の参謀の一人であり、また彼の従兄弟（太祖・宇文泰の姉・昌樂大長公主の子）でもある。この昇格の背景には、宇文護の右腕たる尉遲綱から、より一層の支援を取り付けたい、という狙いがあったろう。また同年五月には、孝閔帝の一人子・宇文康^{うゑんこう}を紀国公に封じ、また武帝の皇子・贇^{おと}（Ⅱ後の宣帝）には、父が名乗っていた魯国公をそのまま継がせている。この封爵は、ある程度儀礼上の形式的なものではあったろうが、宇文護の最終決裁なくしてはありえなかったはずだ。かつて弑虐した天子の子を公爵に据えたり、また一時その即位にためらいを見せた現皇帝の、その子に、父親の爵位をそのまま襲名させるなど、宇文護なりに、天下の運営を一応まっとうに行おうとした様子を看取できる。

保定元年、十一月には、さらに武帝の同母の弟・宇文直^{うゑんちよく}（衛国公）を雍州の牧に拔擢している。雍州は帝都・長安を擁する重要都市だけに、元々宗主か勲臣でなければ就けなかったポストである。それまでは、宇文護本人が担っていたポストだが、おそらくは最高実力者となって超多忙になったのを機に、武帝の実弟の少年衛国公を雍州の長官に就けることとしたのだろう。無論、実質は宇文護の傀儡にすぎなかった筈だが、この衛国公・宇文直が、宇文護の権勢と距離を置いて、自分の意志で行動するようになるのは、まだ先のことである。それは、実兄の武帝の活躍の時期と連動して表れるようになる。が、今は、それには触れないでおこう。ここでは、現皇帝の実弟に重要ポストを禅譲できるくらいのも、大きな精神的余裕が宇文護にあったことを、確認できればよい。

明けて、保定二年、閏一月。大司馬・賀蘭祥^{がらんしょう}が死去した。「年、四十八」だった。宇文護が、「小さい頃から互いに親しみ、軍事・国家のこととは皆、賀蘭祥と一緒に謀ってきた」と記される従兄弟の賀蘭祥（太祖の姉の建安長公主の子）。宇文護の最も信頼した「参謀」だった賀蘭祥は、明帝期に命を受け、西域を荒らす吐谷渾^{とこくわん}対策に専念し、西の守りの

重鎮として活躍。「西土を撫安し、振旅（＝凱旋）して還」（以上、『周書』賀蘭祥伝）っていた。

その吐谷渾討伐に従軍した当時の部下には、学問に通じ武帝の若き日の学業の師でもあり、また「武成二年、（おそらく）五月辛未」―明帝本紀（明帝の）宗廟を監營（『周書』盧光伝）した長史・盧光、および後に陳の猛将・呉明徹と江陵で激戦を戦い抜いた大將軍・高琳（『周書』本伝）らがいいた。こうした優れた部下に恵まれ、吐谷渾の守りに多大な貢献をなして逝った大司馬・賀蘭祥。宇文護の最も心強い同士の早すぎる死去は、全盛期を迎えていたこの宇文護体制を、不安定にする遠因となったように思われる。

その後任には、六月発令で大司空・尉遲綱の実兄、蜀国公・尉遲廻が就任した（『周書』武帝本紀。なお尉遲廻伝には、このこと記載されず）。この時も当然のことだが、大司馬・国防相には、宇文護の信頼を得ている人物が任官したのである。以後、尉遲廻は天和三年四月に、齊国公・宇文憲と交代するまで、まる六年の長きに渡って、北周高官における最要職たる大司馬の地位に就いている。丞相の権力に最も近いこのポストにあつて、尉遲廻は何かにとこの従兄の宇文護を支えていったものと推測される。この人事にも、宇文護の武治主義路線が、じつに明瞭に現れている。

ちなみにこの前月の五月のことになるが、かの随国公・楊忠（＝隋の高祖・楊堅の父）が大司空になり、大司空だった尉遲綱の方は、わずか一年の在職のみで陝州総管に転任している。この武治主義路線の大きな推進役、楊忠の以後の積極果敢な軍功も、じつは徐々に宇文護の専権を微妙に揺さぶる要因となっていくのだが、それについては次稿に譲ることとしよう。数年後のことはともかく、今はまさに、宇文護政権の全盛期が訪れていたと、そういってよいだろう。

保定二年においても、北周朝の行政上の成果は、素晴らしいものがあった。今、『周書』から関連する資料を拾い出してみよう。まず、隆州総管・陸騰なる猛将がいる（『周書』卷28 本伝）。この陸騰は、明帝の時に、陵・眉・戎・資・新・遂（以上、今の四川省）・江（湖北省）・邛（江蘇省）、および合州（安徽省）で起きた数万人に達する反乱を鎮圧した將軍である。ところが保定二年、その資州で再び民の反乱があった。（民は）「郡守を殺し、險に拠り自ら守り、州軍はそれを制することができなかった」。そこで（陸）騰は（自ら）軍を率いて討撃し、尽く破り之を斬った、と記される。北周に併呑された旧梁領土内では、なお治安が取れていない地域も多く、各地で民の暴動が起きていたが、それを快速進撃で制圧していったことが分かる。

続いて今度は、蛮・狼（中国西南部）の兵が、あちこちで蜂起した。なにせ山道は険しいし、北周軍の攻撃もままならない。しかし、陸騰は果敢だった。山川の地勢を計測しながら、自ら道を切り開き前進を続けていったのである。このため、蛮・狼は恐れをなし、服従を願い出ることとなった。しかし、それでもなお鉄山（四川省）の狼は道を分断して抵抗したため、陸騰はさらに進軍を続行。一計を案じ弱体な軍を装ったりして、相手の油断を誘ってにおいて、突然不意打ちを食らわせ、一日に三つの城を攻略する猛進撃ぶりだ。敵の首領を斬り、捕虜三千人、降伏したものの三万戸もあったという（『周書』同）。

ついで、王慶の場合である。この王慶も、太祖・宇文泰とともに闘った歴戦の勇士である。孝閔帝の踐阼の折には、宇文護に引き抜かれ、「典籤の官」（王仲榮『北周六典』によれば、「封爵第十九」に分類されている。爵位の詳しいことは、不明）となつてゐる。保定二年、吐谷渾と境界線を定め和親することとなつたが、吐谷渾の主は悦服し、親しい者を王慶に随行させ帝へ献上させたのである（『周書』卷33 王慶

伝。

北周の強大な国力の主因は、こんな猛将たちの敏腕によるばかりではない。温厚な文人肌の為政者らの優秀さにもあった。たとえば元偉といえ、明帝期にあの麟趾殿学士にも選ばれた、北周朝には珍しい文人官僚だ。もと北魏の宗室筋にあたり、毛並みも良い。有能な文官として、西魏・北周朝を支えた人物である。保定二年には、成州（今の甘肅省）刺史に転任。「（元）偉の政は清静を尚つとび、百姓は悦附した。流民で、復業する者は三千余口もあった」（『周書』卷38 本伝）と記されるように、よそへ流れた民を復帰させるだけの、元偉の温厚な仁政があったればこそといえよう。ついでに、庾信との親交の記録が残っている（建德四年、庾信「謹んで司寇淮南公に贈る」）ことも付加しておく。また、この元偉の同族の末孫は、北周・隋唐とみな学問に秀で、中唐の元稹に至り宰相を送り出すことになる。これも隋唐が、系譜的に北周王朝と濃い関係にあることの一例に過ぎない。

太祖・宇文泰に可愛がられた李和なる將軍も、また民に慕われた人物だった。保定二年には、司憲中大夫（司法務省次官）となり、義城郡公の爵位を賜り、ついで徳広郡公に改められ、洛州刺史へと転じている。この洛州への転任の発表があるや、商・洛の父老らは、昔、李和が夏州刺史だった折、人々に大いに徳恵を施したことを想起して、その声望を望まぬものはなかったという。実際、李和は洛州に着任するや、仁愛をもって民を訓戒し、訴訟ごとでも簡便・静肅そのものだったという（『周書』卷29 本伝）。なお司憲中大夫・義城郡公から徳広郡公・洛州刺史へという経歴は、徳広郡公になっていないことを除けば、庾信の経歴と完全に同一であり、この二人の共通性はまことに興味深い。この庾信の「司憲中大夫・義城郡公」の経歴については、後述するのを参照されたい（10頁）。

さて、本題に返ろう。さらに皇甫璠などは、「性は平和にして、小心をもって法を奉じ、分に安んじ志を守り、恒に清白を以て自処す。当時、号して善人と為す」（『周書』卷39 本伝）と記されるように、その細心・誠実な法の順守ぶり、で、「善人」との評判を得ている。また豆盧勳も、北周・武帝の保定期のこととして、「甚だ恵政有り、華夷悦服し、徳沢流行し、大いに祥瑞を致す」（『隋書』卷39 本伝）と、その善政によって内外の民の悦服を来たしている。

以上、掲げてきたように、北周の治世は將軍や地方の刺史らの大活躍で、各地で多くの民の悦服を来たらしめていたといえる。彼らは、時には艱難にもひるまず勇猛果敢な進撃で、蛮夷の畏怖的服従を手にいれ、また時には長官の仁政や清潔な人品・徳沢などで、多くの民衆の心をがちり掴んだのだった。北周の強さの原因——それは時代の熱望する所をよく理解し、そこへ人心をしかり帰趨せしめ得た、北周軍官の高い政治的力量や熱意、また足並み揃った連係力にもあったといえるべきである。

このような政治的成果に加えて、経済的にも着実な発展があった。保定二年正月、蒲州（今の山西省）、同州（陝西省、北周の覇府）で灌漑用水が開かれ、同年、五月には、年役と租賦の半分が免除されている。これも北周の着実な国力の増進があればこそその英断だろう。

保定二年、二月。もう一つ重要な事件があった。梁・元帝の江陵府を滅亡に導いた、内通者・蕭詧の死没である（『周書』卷48 本伝）。これは、旧梁問題の暗い過去に、区切りをつける一つの機会になっただろう。やがて、武帝の詔勅があった。「梁の汝南王蕭大封、晋熙王蕭大圜（いずれも梁・簡文帝の子）等、梁国の子孫に宜しく優礼を存すべし。式遺茅土（領土）、寔に旧章を允つ」（『周書』卷42 蕭大圜）と。つまりは、旧梁の宗族に対する優遇政策の実施である。このことは、おそ

らく旧梁臣への差別的待遇の解禁、さらにはもっと積極的な融和関係の構築をめざす、第一歩だったことを意味しよう。

その兆候は、前年の保定元年から見えてはいた。明帝期に、やはり麟趾殿学士を授かった蕭撫（『梁・武帝の弟、安成王秀の子』）が、「保定元年、礼部中大夫を授かる。撫に、帛款（『帛順』）の功あるを以て、別に食して多陵県五百戸を賜わり、その租賦を収む」（『周書』卷42 本伝）とある。この蕭撫は、江陵が陥落する以前、益州刺史として成都を守っていて、西魏の大將軍尉遲迥の攻撃を受け、降伏。梁の臣民の強制連行に先立って長安に入り、官職を授かっている。旧梁臣との一層の融和が必要になってきた今、いち早く帛順を受け入れたというその功績に対して、北周側から改めて正式の論功行賞が行われた結果が、この時期の礼部中大夫、並びに「別に食として多陵県五百戸を賜う」という厚遇だったと考えられる。

この蕭撫を手始めとして、保定二年には、かつて西魏・于謹の江陵総攻撃をかわす狙いで、講和のために長安に派遣された「その実は、人質」（『周書』同）だった大使蕭大封、副使蕭大圓兄弟らにも、県公の封禄が与えられている。さらに、保定三年になると、益州刺史・蕭撫の副官だった蕭圓肅（『梁・武帝の孫、武陵王紀の子』）も、帛伯中大夫に除せられている。ただ、この蕭圓肅への別食の時期は、あまり明瞭ではない。史料によると、こう記される。

世宗（『明帝』）の初め、進みて棘城郡公に封ぜられ、邑一千戸を増す。圓肅に帛款の勲有るを以て、別に食・思君県五百戸を賜わり、その租賦を収む。保定三年、帛伯中大夫に除せらる。（保定）五年、咸陽郡守を拜す。圓肅、寛と猛と相濟め、甚だ政績有り。…（『周書』卷42）

これを見ると、別食を賜ったのは保定三年以前のことが、かといって『世宗の初年』のように理解するのは、上司の蕭撫との関連でいうと、部下が先に恩典を賜るというのも妙である。『北史』卷29になると、

周の明帝の初め、進みて棘城郡公に封ぜらる。別に食・思君県五百戸を賜わり、その租賦を収む。後、咸陽郡守を拜し、甚だ政績有り。

と、明帝と武帝期の任官の別のない、ただの羅列的記述に終わっていて、ますます不明瞭である。おそらくこの別食は、上司の蕭撫に継いで、保定元一二年の間に賜ったのではないか、と考えるのが自然なように思う。

さて、このような保定元一二年頃に始まった、北周の対梁宗族への優遇政策の実施だが、これらの宗族に続く形で旧梁の臣下も、北周でこぞって高いポストを得始めていったようだ。庾信とともにかの旧梁臣の代表格たる、王褒の記録を調べてみると、「保定中、内史中大夫（『春官府、文書担当』）に除せらる」（『周書』卷41）と記されている。これ以上の記録はなく、何年のことかは不明だが、保定年間には五年間しかない。

しかも、宗室以前に優遇を受けることは考えにくいから、実際には保定二一三年以降に内史中大夫に除せられたものと想像される。

このように見てくると、旧梁との融和政策が矢継ぎ早に打ち出されていったことが知られる。これは、北周朝が急速に一つにまとまろうとしていたことを示すものだろう。孝閔帝・明帝と、二皇帝を倒してもぎとった宇文護の体制だったが、朝廷の権力闘争などものは、国内は優秀な臣下に支えられ、政治・経済的にすこぶる充実を見せ、いま宇文護の最盛期が訪れていたのだった。

例えば、賀若敦なる人物の処遇には、宇文護の専権のほどが窺える。賀若敦は、明帝の武成二（五六〇）年、陳將・侯瑱・侯安都らに囲まれた湘州の救出に向かい、死闘の挙げ句に五六割の病死者を出して、結局その領土を失うという惨敗を喫した男である。「晋公（宇文）護は、（賀若）敦の地を失い功無きを以て、名を除し民と為」した。が、保定二年には、「工部中大夫を拜し」（『周書』卷28）たという。しかし、この折の宇文護の嚴罰は、賀若敦には甚だ不満だったようだ。後々までその尾は引き、「流輩は皆大將軍と為るに、敦独りは未だ得ず。兼ねるに湘州の役に、全軍反するを以て旌賞を蒙らず、翻って名を除かれ、毎に怨怒を懷く」と、史書はそう記す。かくて賀若敦はついに爆発し、「怨言を出してしまった」。「晋公護は怒り、遂に敦を徵して還さしめ、逼りて自殺せし」（同）めたという。

この賀若敦事件は、朝廷の重要な高官・大將軍等の任免及び褒賞・処罰について、当時宇文護がいかに絶大な権力を握っていたかを象徴するものといえる。このような政治的状況下では、北周・武帝の自立には、まだ当分時間がかかりそうに見える。それまでの間が、宇文護体制の全盛期という訳だが、次稿で述べるように、これが案外長くは続かなかったのである。

二 宇文護と庾信——宇文護のための執筆

「馬射賦」に続いて、庾信が北周朝のためにものした文は、「晋陽公の為に玉律・秤・尺・斗・升を進むる表」だった。いわば宇文護の代筆をやった訳である。執筆依頼の端緒は、「（保定元年）五月：晋公護、玉斗を獲、以て献ず」（『周書』武帝本紀上）と記されるように、宇文護が偶然古い時代の玉斗を獲たことによる。この玉斗を手に入れた経緯につ

いてだが、『隋書』律曆志は、「保定元年辛巳五月、晋国、倉を造り、古き玉斗を獲」と、もう少し詳しく記録する。つまり、倉庫を建設中、偶然発見されたものらしい。宇文護は、それを天子に献上。これを契機に、新しい時代にふさわしい音律・度量衡の制定に関して、その上奏文を庾信に代筆させたのである。

この「玉律……を進むる表」は、従来庾信研究ではほとんど用いられたことのない文献だが、文学的に見て、面白い表現があるとか、趣向が凝らされているとかいうことではないが、当時の北周朝の国家的な祭礼の内容が理解される資料ではある。しかもよく読むと、これがまさに太史公・庾信そのものという文章となっており、この意味でも興味深い。内容はかなり分かりづらいが、以下、少しずつ区切って内容を取り、現代語訳をつけていこう。

臣、某（＝宇文護のこと）は申し上げます。臣の聞き及ぶ限りでは、すでに天地人の三つがともに自立し、あるべき君臣の新しき道も説かれるようになりました。そして、君臣・父子・夫婦の道もすでに定まり、礼楽も今まさに正しく整えられたのであります。したがって日月も運行が正確で、陰陽も計測通りに進行し、億兆の民の上に喜びが広がり、儀礼・刑法は万国の上を覆っております。

伏して思いまするに、皇帝陛下は天子になる瑞祥をお授かりになり、その天命をお受けになりました。そして、太陽に準拠して法令を掲げられ、オオクマ座を基準として宮殿をお建てになりました。また白い環の献上は、陛下の徳を称えるためにでございます。玄い珪の奉納は、陛下の成功の瑞祥としてでございます。

今や、天上の上中下三層の星座すべてが、和氣に満ち満ちております。この喜びを天へ報告すること、過去の先例に倣うべきかと心得ます。必ずや我らが運氣は、自然山河のごとく、千年万歳に及びましょうぞ。

伏して勅旨を拝見致しまするに、音律を正し、曆数と天文を明確にせよとの思し召しでございます。そこで「黄鍾」を演奏し、「大呂」を歌い、「孤竹」を演奏し、「雲門」の舞いをまってみましたところ、度量衡もよく諧い、声楽もよく整っている様子でございます。一年が三六五日と四分の一であることも、しっかり確認されましたし、また季節が十五日ごとに移動していることも、きっちり定まっております。

これは、『周礼』『大師』の音律論を踏まえた文章である。

ゆえに、洛水のほとりで鐘を聞いて、もしその音律にズレがあれば変更できますし、また邯鄲で鐸を聞けば、その響きの風雅さを知ることでありましょう。天文の春分・秋分の二分と、夏至・冬至の二至とは、曆官にしっかり管理させていますし、音楽の九変・九成の調音は、これまた楽官にきちんと行うよう指示してございます。この「九変」は、『周礼』『大司楽』に記載されるのを踏まえたもの。

かくてこそ、天地をも動かし、鬼神をも感じさせ、世の風俗の全体をすっぽり包み、暑さ寒さも均等に分かつことができるのだと申せましょう。音律の制定というものは、ただ単に溪谷に嘯き吟じたり、また鸞や鳳を飛び回らせるだけで宜しいのでしょうか。そういうことのために、零陵の舜帝廟まで赴き、昔、舜帝の用いられた

太古の木管を捜し求めても、それは徒に空しいことといえます。それでは昔、晋の名音律家・阮咸が、始寧城で古代周王朝の音律の基準について空論したのと、全く同じことであります。

臣は、こうお聞きしております。お上が国家の礼を制定し、民はその儀に従うものであり、また君主がその法を定め、臣下はそれを実行するものである、と。さればここに、謹んで玉律を定め、あわせて玉秤・尺・斗・升・合等の度量衡を施行致すことになった次第です。これがあれば、必ずや天下の運営は成功することでしょう。この基準に基づいて、粟・黍を計量する器の大きさを定め、さらに糸の長さを量り、容積の単位を調節することに致します。その際、聖なる天の基準を仰ぎ奉り、天の御心を詳細に参考に致したく存じます。

以上は、『漢書』『後漢書』の律曆志に倣い、書かれた部分である。

請い願わくは、天の陰のリズムが笛の穴の調節にうまく移し代えられ、河内地方のかの葭の灰の力を借りずとも済みますように。また天の陽の氣が、鐘の調律にうまく置き換えられ、金門の竹管を勞さずとも済みますように。

昔の琬や琰の玉の定めは軽いものであり、また魯般・共工の思慮は浅薄なものであります。彼らの度量衡では、物事を公平に量ることはできませんし、光輝を増すこともできません。今、度量衡の器を賜りましたので、以上のごとき表を奉じて、ここに上奏申し上げる次第です。

と、本分の全体が北周の国是たる『周礼』や、また『漢書』『後漢書』律曆志等を主として踏まえて執筆されており、まさに当代の太史令・庾信の面目躍如たるものがある。

保定元年、三月の「馬射賦」に続いての、この「玉律」を進むる表」の執筆には、おそらく宇文護による、庾信取り込みの狙いもあったのだろう。皇帝のお側に仕えて、その華麗な修辭を駆使して、最高の教養と言辭で詩賦を綴り得る庾信は、また旧梁朝の臣民、および文化の象徴的存在でもあったから、北周側にとってはどうしても取り込まねばならない存在だった。梁民の怨みの声に封印するためにも、また再び新皇帝に利用され、宇文護体制と対決する勢力とならぬためにも。一方庾信の方は、この危険な宰相・宇文護の体制の行方を見守りつつも、その命にただ従うよりなかったと思われる。明帝期に、既に武帝の評価を得ていた庾信だが、その武帝が未だ天下を動かす事態には、至っていないかったからである。

ところで、北周が徐々に政治的・経済的安定を増していくのと並行して、北斉の方も「酒を縦にし欲を肆にし、事は猖狂に極まり、昏邪残暴なるは、近代未だ有らざるなり」(『北斉書』孝昭帝本紀)と記される、その孝昭帝が、保定元年、十一月に没。代わって、二十五歳の武成帝が即位する。武成帝は、武断的気質の皇帝だったから、以来、北周との間に軍事的緊張を高めることとなる。ついに、来るべきものが来たのだった。この北斉との軍事的緊張が、北周内部の結束強化を促させ、旧梁臣の処遇を早急に改善せねばならない、大きな要因としてあったと考えられる。かくして、翌保定二年に、旧梁の宗族や臣下らに対する優遇策が取られることとなったと、こう解することができる。これを機に、旧梁臣らの不満や気持ちは少しずつ軟化し始め、北周・宇文護政権への協力体制が徐々にではあるが、進んでいったかに思われる。

保定二年、五月五日、黄河が澄むという珍しい事件があった。北斉は、自国の瑞祥だとして、年号を「河清」と改めた。北斉においても、急速に態勢の充実が見られるようになり、北周・北斉間には、一層の軍事的緊張が高まっていく。

保定二年、七月。「大冢宰晋国公が、石関の谷に鑿るを命」じたため、庾信は再び宇文護の命により、筆を取ることとなった。「終南山の義谷銘 並びに序」である。この序文中で、庾信は「大冢宰晋国公・宇文護のことを、「功を為すこと実に重く、国は富み人は殷にして、方に千載に伝うべし。功の事を立つるに因り、敢えて山阿に勒む」と、その功績の大きさを賞賛して、ぜひとも山の面に刻んで千年の後にまで伝えなければならぬ」と記す。かつて、この危険な宰相に、強い不信任を抱いていたのに比べると、驚くほどの庾信の変貌である。それだけ、時の最高実力者・宇文護の絶大な威光への、無言の服従があったということだろう。当時の宇文護の権勢は、まさに絶頂期を迎えていたのだった。

同年、十月、少陵原にて大々的な閱兵式が行われた。北斉との決戦に備えての軍事演習を目的とするものだった。この時、庾信も武帝の駕に随行して、式の模様を観閲し、その様子を詩に描いている。それが、「駕に従い式を講ずるを観る」詩だが、これが庾信の北周朝に対する積極的な姿勢を示したものであること、さらに文学的にも北朝の質実剛健な気風を繁榮し、庾信にとって、大きな方向転換を見せたものであること等については、前稿で述べたので省略する。

保定二年十二月。こうして準備万端、軍勢を整えた武帝は、いよいよ北斉に攻め入った。これが、武帝の初戦だった。この時の戦闘の記録は、なぜか『周書』武帝本紀には記載されていない。『北斉書』巻16段韶伝の方にのみ、こう伝えられている。

(大寧二年)：十二月、周の武帝は將を遣し、羌夷と突厥の合衆(連合軍)を(并州||太原の近くの)晋陽に逼らしむ。世祖(武成帝)は鄴より道を倍して兼行し、救いに赴く。突厥、北より陣を結んで前み、東のかた汾河を距て、西のかた風谷を被う。時に事は既に倉卒として、兵馬未だ整わず。世祖、此くの如き(北周軍の弱体ぶり)を見、亦た之を避けて東せん(鄴へ引き返さん)とす。時に、大雪の後、周人は歩卒を以て前鋒と為し、西山より下り、城を去ること二里なり。(北斉の)諸將威之を逆撃せんと欲す。段韶曰わく、「歩く人の氣勢には、自から限り有り。今、積雪既に厚し。彼は勞れ我は逸ぐべし。之を破ること必ずなり」と。敵の前鋒尽く殲れ、子りも遺す無し。

ただし、この戦闘記録を、じつは北周の年号でいえば、保定三(五六三)年の十二月の誤りだとする見方もある。他の史料と照合するに、この部分は、北斉の「大寧二年(一河清元年と改めている。北周では、保定二年に当たる)……」に続けて読むのではなく、「疑うらくは、上に河清二年(すなわち、北周の保定三年に当たる)の四字が脱けているのだらう」(中華書局版『北斉書』校勘記)と。年号の脱落は、記録の不備の多い『周書』でも、相当見られることだが、『北斉書』でもその傾向は同じようだ。この時の交戦内容は、後述するように確かに保定三年十二月の戦いによく類似する。また保定三年十二月の交戦記録が、複数の伝記に載っているのに、保定二年十二月の方は、ここのみというのも妙ではある。あるいは、保定三年の十二月のことなのかもしれない。

三 庾信の官歴―弘農郡守・司憲中大夫についての問題

北周軍の大東伐は、保定三年九月頃から開始される。両国の壮絶な戦闘の幕開けだが、この戦闘については、次稿でまとめて取り上げることとして、ここで問題にしたいのは、庾信の官歴についてである。まず第一に、庾信の弘農郡守任官はこれまで言われてきたように、明帝期なのではなく、じつはこの北斉との開戦以後のことだったのではないか、というのが拙論の立場だ。この弘農郡長官時代の重要な作品に、「陝州弘農郡五張寺経蔵碑」というのがある。詳しくは、既に前稿で述べたが、五張寺のために書かれた「碑文」の、第五段落に、その執筆上の契機が述べられている。そこには、弘農郡の故老らが長官・庾信との別れを惜しんで、この碑文を制作してもらった旨、言及されている。それは、次のようなものである。

天子は私にお命じになり、試みにこの弘農郡を守らせることとなった。仕事は多忙で、わが家でのんびり休んだり、くつろいだりすることなどできなかった。初めて弘農郡のような国境に臨み、水軍の闘いも経験した。既に南朝は振るわず、(天下の大勢は)北朝に移っている。北周の幕府が開かれ、私は郡の長官としてしばらく留まることとなった。郡の故老らは、これまでの私の在任中のことを惜しみ、別れに際して今回の寺の法事のついでに、私にこの碑文を作らせたのである。

と。弘農郡は黄河に臨み、北斉と国境をま近かに接する重要都市である。ために、ここから軍船がしばしば出帆していったのだらう。そうした激

しい戦闘に対する弘農郡の人々の憂い、そして、仏法にすがって救いを求めようとする人々の願いを、庾信はその銘の中で、こう代弁する。

昔は 立派な畿内だったのに
今では 戦乱の地に

昔為畿服
今成塞垣

この辺の城は かつて楚と漢の
争いし 広武の地か

城疑広武
地似楼煩

はたまた 趙と胡で
争奪しあつた 楼煩の地か

燿烽並照
象馬单奔

烽火は 一斉に上がり
象や馬は (主を失いか?)

無鐘襲莒
有雨阡原

戦闘の合図の 鐘もないまま
相手の国を だまし討ちにした

不資十方
誰釈三怨

雨が降っている日に
相手の原野を 囲んでみたり

ああ これでは

十法の仏力に よらなければ
この怨み 誰が釈けようぞ

このような北斉との激しい戦闘は、明帝期にはほとんど記録がない。

明帝の二(五五八)年、北斉の將軍・司馬消難が投降してきた事件がある程度だ(『周書』楊忠伝)。双方の激戦の記録が、文献上確認されるようになるのは、武帝期以降になってからである。しかも、『北斉書』校勘記の指摘が正しければ、保定三年以後のことである。この他、前稿で指摘したことも踏まえて、要点を列記すれば、

①明帝の二年(―正式の年号はまだなかった)の作である「旧を思

う銘」は、異境に苦悩する庾信ら旧梁臣の心を描いたものだが、これに対し「弘農郡碑」は、北周での任務に忠勤を励み、郡の民らに歓迎されたことをいう内容であり、両者は全く異質である。制作年代そのものを、分けて考えるべきである。

②本碑文、及び「滕王道原序」の中で言及される、庾信の弘農郡長官時代の精励ぶりは、武帝期に入り旧梁宗臣優遇政策を実施して以降の下の方が、自然である。

③軍事上の拠点たる弘農郡の長官への任官は、宇文護の判断が大きかったはずだが、「華林園馬射の賦」「晋陽公の為に玉律を進むる表」「終南山義谷銘」「駕に従いて講武を観る」等の作をものした後の庾信なら、宇文護の目に一応信頼できる「北周人」として映ったと考えられる。

④明帝期の「明皇帝の絲布等を賜るに謝する啓」で、庾信は極貧を訴えているが、武帝期以後に弘農郡長官に就任しているとするなら、その貧窮ぶりも矛盾なく理解できる。

等のことから、早くとも保定三(五六三)年、庾信五十一歳以後の任官と推測される。

次に、庾信が弘農郡長官として勤務したその期間だが、これも旧説は疑問が多い。倪璠は、「庾信は弘農郡に出て守(＝長官)となったが、間もなく朝廷入りして司憲中大夫となった」(「按するに、信、出でて弘農に守たるも、未だ久しからずして入りて司憲と為る」)本碑文中の倪(注)と解する。つまり、倪璠の年譜だと、明帝の二(五五八)年に弘農郡守(庾信、四六歳)、その二年後の武成二(五六〇)年に司憲中大夫(庾信、四八歳)というように、そう長くはなかったとする。従来の庾信年譜は、おしなべて弘農郡守・司憲中大夫を一括して、明帝期の任官とする立場だが、これに従えば明帝の在位が短かった以上、庾信の弘農

郡長官としての勤務も当然短くなる計算だ。

しかし、これは事実だろうか。庾信が司憲中大夫に昇進した時の作に、「正旦に司憲の府に上る」「趙王に答う啓」の二作があるが、前者では、「孟門（秦地方）に、久しく、路を失う」といい、後者には「本分は泥沈する（のが自然な人間なの）に、忽ち天造に逢い、仄陋より搜し揚げられ、今、遂に憲司に総ぜらる、…但だ年髪已に秋にして、精靈久しく竭き…」とある。その詳細は後述するが、今これらの資料から、関係する点のみを取り上げ検討すると、庾信本人は地方官時代が「久しく」、また「年髪已に秋にして、精靈久しく竭き」と、司憲中大夫になった時には、かなり老け込んでいたと説明している。

その上に、この「趙王に答う啓」の制作時期だが、趙王・宇文招が、趙国公より王に爵位を進めたのは、じつは「建徳…三（五七四）年、爵を進めて王と為る」（『周書』巻13 文帝諸子列伝）と記されるように、庾信六十二歳のことなのだ。庾信自身の作品から推していくと、庾信は早くて保定三年頃に弘農郡守になったとして、建徳三年に司憲中大夫になるまでの間は、十年余りとなる。実際、これほど長く弘農郡の長官をしていたかは疑問もあるが、ともかく弘農郡の長官の任が「久し」かったということにはなる。ただ、記録が正確なことの多い『周書』のことだから、もう少し判断材料が必要だが、今はこれ以上の資料がない。弘農郡守の任用期間については、この程度の推測に止めておくしかない。

ところで、庾信はこの弘農郡守の後、「司憲中大夫・義城郡公」になっているが、この任官の時期についても、少しわき道にそれてみたい。庾信が司憲中大夫・義城郡公となった時期については、諸説がある。清・倪璠注『庾子山集註』所収の「庾子山年譜」によれば、明帝の武成二（五六〇）年の時とする。いうなれば、庾信はすでに早い段階で北周高官に就任していたとみる見方である。現在でも、なおこのような年譜が通行

しているが、この旧説は資料的根拠に乏しい。これを資料的にもっと明確に検証できないだろうか。

北周の職官・爵位については、今日、王仲犛『北周六典』によって、歴代の人物を年代順に確認することができるようになっている。そこで、以下、司憲中大夫に任官していた者を列記してみよう。なお司憲中大夫は、定員二名である。

○孝閔帝の踐阼の頃、任官した者

權景宣：「孝閔帝、踐阼し、徴されて司憲中大夫と為る。」

（『周書』巻28 本伝）

侯莫陳凱：「孝閔帝、踐阼し、工部中大夫を拜す。司憲中大夫に転ず。」

（『周書』巻16 本伝）

○明帝期に任官した者

王悦：「司憲中大夫に遷り、保定元年、位に卒す。」

（『周書』巻33 本伝）

庾信*：「孝閔帝踐阼し、臨清県子・邑五百戸に封ぜられ、司水下大夫に除せらる。出でて弘農郡守と為り、驃騎大將軍、開府儀同三司、司憲中大夫に遷り、爵を義城県侯に進む。俄かに洛州刺史を拜す。」

（『周書』巻41 本伝）

○武帝期・保定二―三年頃

李和：「保定二年、司憲中大夫に除せらる。尋いで出でて洛州刺史と為る。」

〔周書〕卷29 本伝

拓跋迪…「司憲大夫拓跋迪、法律を撰定し、保定三年三月に至り就る。之れを大律という。」

〔隋書〕卷25 刑法志

○保定五年頃

陸騰…「保定五年、司憲中大夫を拜す。天和四年、江陵総管に遷る。」

〔周書〕卷28 本伝

元暉…「武帝の突厥の后を嬖^{むか}えるとき、(元)暉をして礼を致せしむ。開府を加え、司憲大夫に転ず。」

〔隋書〕卷46 本伝

(補足)

「保定五年二月、詔して…(突厥王の)俟斤^{しきん}の牙帳所に至らせ、后を迎えしむ。」

〔周書〕卷9 皇后列伝

○保定年間?

王長述…「周、受禪し、賓部大夫を拜す。出でて晋州刺史と為る。玉壁総管長史に転じ、尋いで司憲大夫を授かり、出でて広州刺史と為る。」

〔隋書〕卷54 本伝

○天和六年

裴文举…「天和六年、入りて司憲中大夫と為る。俄かに軍司馬に転ず。」

〔周書〕卷37 本伝

○建德年間の中―末頃

元孝矩…「(建德元年)晋公護の誅されるや、(その妻が自分の妹だった関係で)坐して蜀に徙^{うつ}さる。数載して、徴されて京師に還り、益州総管司馬を拜し、司憲大夫に転ず。」

〔隋書〕卷50 本伝

王仲榮氏の整理を、一部筆者の「補足」を加えた上で掲げれば、以上のようになる。これよりすると、孝閔帝期はわずかに一年余なので、権景宣・侯莫陳凱の二名のみがこの任にあったのだろう。次の明帝期だが、王仲榮氏は、王悦とともに庾信が司憲中大夫に任官したと見ている。しかし、前稿で詳しく述べたように、この弘農郡長官の任官は明帝期のことではなく、じつは武帝即位以降のことだろうというのが卑説なので、これに沿って考えるならば、司憲中大夫への任官が、明帝期のことというののもまたあり得ない。

旧来の庾信年譜は、弘農郡守・司憲中大夫を一括して、明帝期の任官とするが、庾信がこのように王褒より格段に早い昇任をしていたという明確な根拠は、何もない。庾信より、王褒の方が実務能力に優れていたとされるから、じつは王褒の方が中央での任官が早くて、庾信の方は地方勤務で、かつそれが長かったということさえ有り得るのだ。史料には、庾信の親友・王褒が内史中大夫になったのは、「保定中」と記され、また前述のように、旧梁室の蕭撫(梁の武帝の弟、安成王秀^{しやう}の子)が礼部中大夫になったのが、「保定元年」。蕭圓肅(武帝の孫、武陵王紀^きの子)が畿内中大夫に除せられるのが、「保定三年」である。こういう旧梁の宗室・高官との任官の関係からいっても、明帝期に、庾信のみがはや司

憲中大夫となったというのも、信をおきたい。

卑見によれば、保定年間に入り、庾信は宇文護と「晋公の為に玉律秤尺斗升を進むる表」（保定元年五月）、「終南山義谷銘」（保定二年七月）等の作品を介して直接接触を持つようになり、また旧梁への優遇措置が示されるようになって以後、いつの頃から、初めて北周朝でまともな地位に就いたのだと考える。その最初の官が、弘農郡の長官だったのである。

さらに庾信は、この弘農郡のポストについて、司憲中大夫に任官する訳だが、それは王褒・蕭瑒・蕭圓肅らと同時期の、保定年間のことだったのだろうか。王仲筆氏によれば、保定二年に司憲中大夫の官にあったのは、將軍・李和、拓跋迪の二人だが、彼らはこの時、廷尉卿・趙肅が西魏の大統十六年より開始して、志半ばで病没した、その後を継いで、新法律Ⅱ「大律」を策定する重要な任務に当たっていた。「大律」は、保定三年二月（『隋書』「刑法志」）が、保定三年三月とするのは誤り―内田吟風説による―に完成している。この「大律」というのは、『旧唐書』「経籍志」に、「周大律二十五卷」、また『新唐書』「藝文志」に、「趙肅等周律五卷」と記され、後には改訂を経て『隋律』へと発展していく、その原型をなす重要なものである。

このような「周大律」だったことをよく押さえた上で、王仲筆氏の整理を振り返ってみると、庾信が明帝期に廷尉卿・趙肅の後を継いで、このような「大律」制定の任務を命じられていたとは考えがたい。また王仲筆氏の整理では空白になっている、保定四年の箇所だが、庾信が李和の後任として、ここに入り込む可能性については、右に述べたように、このような新刑法を総括するという重責を、この時期外人官僚の庾信が担い、その謹厳な遂行を委ねられるというの、また極めて考えがたくありえない。ちなみに、庾信がこの李和と同様の官歴を歩んでいる点も、一応注意される点である（3頁参照）。

また保定五年の箇所について、王仲筆氏は陸騰一人を掲げるのみだが、今回『周書』皇后列伝の記述と照合してみても、前表に掲げるように、じつは元暉もまた、この年任官していることが明かとなった。とすると、保定年間（五年間ある）に、庾信が司憲中大夫に就いていたとするのは、ほとんど不可能だということになる。「大律」制定後しばらくは、北周生え抜きの重鎮らが、この新法律の管理を託されたと推測するのが順当な所だろう。

王仲筆氏の整理によると、保定年間の司憲中大夫の任官者氏名はほぼ出ているが、天和年間（七年間）・建德年間（七年間）の任官者の氏名は、裴文举と元孝矩の二名しか分からない。十四年間といえは、実際にはもっと多くの人間が任官していた筈だが、史料にはその氏名は残されていない。では、この天和・建徳の両年間の、いつ頃庾信は任官しているのだろうか。

庾信の司憲中大夫任官を示す、庾信本人の直接の発言資料は、前述のように「正旦に司憲の府に上る」詩と、「趙王に答う啓」の二つである。ここには、司憲中大夫就任の折の事情や心情が詠じられている。

孟門久失路 孟門（秦地方）に 久しく路を失するも

扶搖忽上搏 扶搖 忽ち上に搏（羽）ばたく

（「正旦に司馬の府に上る」）

庾信めは、元々大した学問も、政治のすべもなく、埋もれているのが本分にございますが、忽ち天意に出会いますや、陋巷から私めを探し出され、今や司法府の任に就き、歳の初めより刑や法のことに関わっております。この初春、官庁の木鐸の音を響かせ、人々に法令を告げ知らせることに致しましょう。ただ私めの齢はすでに秋

を迎え、氣力の方も弱くなっています。この司法府に置いてある嘉石や肺石とて、どうしてわが衰えを測り得ましようか。わが舌もわが筆先も、いたずらに煩わしくなっているばかりです。

〔趙王に答う啓〕

この二作ともに、制作時期は直接言及されていないが、ただそれを窺わせる史料がある。繰り返しになるが、この趙王が王の爵位を賜ったのは、建徳三（五七四）年のことだ。それ以前は、趙国公を名乗っており、庾信も、趙王が趙国公だった時には、「趙国公集序」なる文を書いていり、この「趙王に答う啓」は、趙国公が王の爵位を賜った、建徳三年以後のことではない。従来の庾信論では、この「趙王」への昇格の年を全く無視して、庾信の経歴を作成しているが、それは無理な見解といわざるを得ない。

この他、庾信の右の老衰表現も、建徳三年説を有力なものとする資料になるが、もう一つ、間接的な資料がある。じつは庾信の北周朝への積極的な出仕は、王褒ほど早くなかったと思われる節がある。というのは、「王司徒褒を傷む」詩（建徳五年、庾信六四歳の作）に、

静亭空繫馬 静亭 空しく馬を繫ぎ
閑烽直起烟 閑烽 直ちに烟（＝狼煙）を起く
不廢披書案 （王司徒は）廃さず 書案を披くを
無妨坐釣船 妨げる無し 釣船に坐するを

とあり、前の二句は防御の甘かった江陵の陥落をいい、後の二句が王褒の北周への出仕についていったものだが、これよりすると、王褒は北周

のために、文筆を取るのを「廃さず」（＝拒まず）、また彼らの「釣船に坐す」（＝政權に協力する）のも「妨げなし」としたと語られる。これは、王褒が、北周への出仕をすんなり受け入れたことをいうものだが、裏を返せば、自分は王褒のようにはなかなか割り切れなかった、という意味かと想像される。

明帝期でも、できれば実際の政治から離れて、静かに隠棲したいと繰り返し表明してきた庾信だったから、武帝の保定年間の初期の頃は、まだ朝廷の要請を受けて、文筆上の仕事をする程度で、王褒のように「廃さず」「妨げなし」という所まで、踏み込めてはいなかったのだと考えられる。庾信の心の奥に引つかかったもののゆえに、庾信の実官としての任官が遅れたのだろう、と私は推測する。以上のことからして、庾信の司憲中大夫への就任は、建徳三年以降の時期と改められるべきと考える。

となると、前述したように、庾信の弘農郡長官の在任期間が相当長かったことになるが、これは「孟門（＝秦地方）に 久しく、路を失す」（「正旦に司馬の府に上る」というのと対応しよう。この「路を失す」ということの意味だが、生臭い中央政府から距離を置きたいと、常々そう願っていた庾信が、自らの意志で選んで、「久しく」地方の長官を務めていたのだと考えられる。この弘農郡長官のポストは、決して朝廷の意向ではなく、庾信の希望に沿うものだったのだろう。「久しく路を失」していたという発言は、そういう地位に己を就けていたとして、朝廷を責める趣旨のものではありえず、むしろ自己の消極的な出仕のあり方について、朝廷に対し遺憾の意を表明したものと考えられる。それが、今ようやく自分は、中央政府の責任ある高官（＝司憲中大夫）を、前向きに受ける気持ちになったということを、言わんとしたのだろう。

庾信の原作に即して、彼の経歴を改めて構成すると以上のようになる

のだが、しかしこの卑説は旧説と大きな隔たりがある。筆者は、これと異なる旧来の「庾信」像というのは、原作から離れた所で形成されてきた、もう一つの「庾信」像なのだと思う。この二つの庾信像については、稿を改めて論ずることとして、今は、庾信の司憲中大夫への就任の時期をこう解釈すると、『周書』『北史』の庾信伝の記述とよく符合することを指摘するに止めたい。拙論では、何度も引用した部分だが、再確認の意味でもう一度全文を掲げる。

孝閔帝踐阼し、臨清県子・邑五百戸に封ぜられ、司水下大夫に除せらる。出でて弘農郡守と為り、驛騎大將軍、開府儀同三司、司憲中大夫に遷り、爵を義城縣侯に進む。俄かに洛州刺史を拜す。(庾)信、多く旧章を識り、政を為して簡静なれば、吏民は之を安んず。時に陳氏は(北周)朝廷と通好し、南北の流寓の士は、各々其の旧國に還るを許す。陳氏は乃ち王褒及び信等十數人を請う。高祖唯だ王克、殷不害等を放して、信及び褒は並びに留めて遣わさず。尋いで徵されて司憲中大夫と為る。

〔『周書』本伝〕

右の文で、「俄かに(＝急に)洛州刺史を拜す」とあるが、これは建德三年頃「司憲中大夫」を務めて間もないのに、間髪を置かず慌ただしく、建德三・四年頃、「俄かに洛州刺史」に就任した意味と解せられる。もし旧説のように、明帝年間に司憲中大夫に就いていたとすれば、十五年後ぐらいもしてから建德年間に、「俄かに」転任したということになる。そうなると、この人事異動自体が間延びして変だし、「俄か」で慌ただしい転任というよりは、「ようやく」「やっと」といった表現にでもなる所である。また続けて、「時に陳氏は(北周)朝廷と通好し」と

記されるが、この「時に」というのは、史料に建德四年のことと明記してあるから、建德三年頃「司憲中大夫」に就任したと解すれば、同三・四年に「俄かに洛州刺史」に就任し、ちょうど「この時に」陳へ帰国する者があつたと、この前後の文意はすべて無理なく通ることになる。この陳との交流については、次章で論ずることとした。

四 陳との交流の開始

さて、保定初年の庾信の事跡で、もう一つ大事なことは、江南の陳朝との通好が始まり、当時の庾信らの心にいささか動揺が起きたことだ。前章末で述べた陳への旧梁臣の帰国は、この保定初年よりずっと後の十四年後の、建德四年のことである。この章では、この北周と陳との初期の交流の実態と、庾信らの心境について辿ってみよう。

陳との国交再開は、現皇帝文帝の弟、安成王・陳瑱の帰還の話から始まった。陳瑱は、当時北周の都・長安に人質となっていたのである。

初め、陳の文帝の弟の安成王瑱は梁で人質となっていた。それが江陵が陥落したことで、瑱も例によって長安へと連行されて行つた。陳側が王の帰還を要請したところ、太祖・宇文泰はそれを許可したものの、実行には移さずにいた。

〔『周書』杜果伝、『北史』ほぼ同じ〕

この背景には、北周と陳との冷戦構造があつた。もっといえば、北周の傀儡王朝たる南梁朝(皇帝・蕭詧、江陵を中心とした小国)の、丞相・王琳おうりんの率いる軍が陳朝と激しい戦争を繰り広げていたのである。しかし、明帝の武成二(五六〇)年二月、その王琳軍は壊滅、王琳が北斉

に亡命するという事態に至った。危機感を抱いた北周は、同年八月、総司令官・賀若敦を派遣（5頁にも言及）。水陸両面から猛攻撃をかけた。陳朝も負けじと応戦。以後、一年間、両国はこの境界線で死闘を展開するが、その結果北周側が敗退。保定元（五六一）年七月、賀若敦は陳朝側の和解案を受諾、撤退する（『陳書』世祖本紀、『周書』賀若敦伝）。かくて、かなりの領土が、陳朝側に帰したのである。

これと並行して保定元年六月、北周は旧梁臣の殷不害（北周の治御正の官）を陳に遣わし、また同年十一月、今度は陳が使者を遣わしている。この時の相互の協議によってだろう。保定二年正月、陳頊の帰還決定となるのである。「陳主の弟頊を以て柱国と為し、江南に送還」（『周書』武帝本紀）、と記される。

この陳頊帰還の際の外交取引については、先行する報告文があるが、いずれも概略にとどまるので、もう少し詳しく見てみることにしよう。

やがて武帝の時にあって、帝は王を帰すこととした。そこで、杜杲に命じて使節の役としたのである。陳の文帝は大いに喜び、招きに応じ使者を派遣してよこし、そのお土産に黔中（『今の湖南省・四川省』などの数州を贈ることとした。その上で、国境線を区切り、長き善隣関係を結ぶことになった。帝は、杜杲がよく務めを果たし、天子のみ心になかったとして、彼に都督の位を授け、小御伯となした上で、国境まで遣わしたのである。

かくて陳側は、魯山（『湖北省漢陽県北』）をわが北周朝へと割譲したのだった。武帝は、頊を柱国大將軍とし、杜杲に詔して王を送って帰国させた。陳の文帝は、杜杲に言った、

「わが弟が手厚い礼を被り、帰還できたのは、まことに貴国のご好意の賜である。しかし、かの魯山を貴国に返還せなんだら、今回

のことはおそらく実現しなかったろうな。」

杜杲は答えて言った、

「安成王どのは、わが関中にあつては、無官の一平民でございます。しかし、お国にとっては、大切な陛下の弟君であらせられますから、そのお値打ちたるや、たった一城にはとどまりませぬ。わが国では、親族を大切にし人には寛大ということを、上は亡き太祖の遺命として従い、下は善隣のための道と考えておる訳で、こたびかような徳を發揮する理由も、そういう次第によるのでございます。もし魯山を取るを止めよという貴国のお気持ちを知つていたら、我々としてもよりこのような一鎮を貪るようなことは致しません。ただ魯山は梁の旧領地です。梁はわが国の藩臣でありますから、その経緯からいえば、なおのこと魯山は、わが国にた戻ってきたというに過ぎません。ごく当たり前の領土でもつて、陛下の大事な骨肉の肉親と交換されるというのは、使者の立場としてはいかなものか、と思われるのであります。とすれば、どうして今のお話を、わが朝廷に奏聞できましようや。」

陳の文帝は、暫くきまり悪そうな表情をしていたが、こういつた。

「今のは、ただの冗談じゃよ。」

（『周書』杜杲伝、『北史』ほぼ同じ）

右が、安成王頊の帰還に関する外交取引の全文である。これを機に、北周と陳の交流が徐々に行われるようになっていく。その後保定年間に、陳が使者を派遣してきたのは、記録によれば、保定二年九月、保定三年七月、十月、保定四年九月、保定五年十一月の計六回ある（『周書』武帝本紀）。一方、北周から陳へ使者が赴いたのは、天嘉五（保定四）年

四月、五月、天嘉六（保定五）年四月の四度である（『陳書』世祖本紀）。陳頊帰還交渉の特使は、周弘正という人物だった。記録によれば、天嘉元（北周・明帝の武成二）年、「（周弘正は）侍中・国子祭酒に遷り、長安へ行き高宗（＝安成王・陳頊のこと、後の宣帝）を迎え、（保定）三年、周より還る」（『陳書』周弘正伝）、「（安成王は、）天嘉三年、周より還る」（『陳書』宣帝本紀）とある。これらを総合すれば、武成二（五六〇）年の何月か、特定できないが（王琳軍の壊滅以後か？）、周弘正が長安入りし、保定二年の正月に、安成王・陳頊を帰還させる決定が下され、翌保定三年に晴れて、安成王・周弘正らは陳に帰国したことが分かる。

この間周弘正は、北周に三年余も滞在したので、いろいろな人物と会っている。その中に、明帝に礼敬された、かの「逍遙公」韋叟がいた。

陳は、尚書・周弘正を派遣してよこした。周弘正は、以前より韋叟の名を聞いていたので、会見を願い出た。北周の朝廷は、これを認めた。周弘正は、韋叟の家に至り、一日中歓談し、出会う日の遅かったことを恨んだ。後に、韋叟に迎賓館に来るよう請うたが、韋叟は赴けなかった。そこで、周弘正は彼に詩を贈った。

徳星猶未動 徳星 猶お未だ動かず

真車詎肯来 真車 詎んぞ肯て来たらん

当時、両者が敬服しあった様は、このようだったのである。

（『周書』巻31 韋叟伝）

なお、この「逍遙公」韋叟だが、かの名将・韋孝寛の兄にあたり、また彼の末裔が唐の韋匡賛で、杜甫に「公安にて韋二少府匡賛を送る」詩がある。その中で、「逍遙公の後世、賢多し」と謳われているように、

彼の名声は唐代でもなお生きていたことが窺える。北周から唐へと繋がる家譜は、杜甫・元稹の家を初めとしてかなり多いが、この韋叟―韋匡賛の場合も、約二百年の時を結ぶ系図の一例としてある。ちなみに、北周の閼隴集団の人脈が、隋唐以後も強い影響力を持ったことは、史学上の常識である。したがって、北周朝の試みた様々な政治システムや理念、またその文化を抜きにして、隋唐は全く語ることができないことを、改めて述べておきたい。

従来、北周の庾信というと、江南への忠義に燃え、死ぬまで北周の臣たることを恥じた、愛国詩人という立場で論じられることが多かったが、私は庾信研究を進めるにつれ、実際は必ずしもそうではなかったと考えるに至っている。つまり、庾信は悲しみを秘めながらも、新しい世界の潮流を冷静に分析し、この新生の御世のために、己のなしうることを懸命に果たそうとしていたと、こう理解する。庾信の活動は、北周の田舎都市・長安に、世界の大国としての風格をそなえた文化を、徐々に根付かせていく上で、大きな意味があったように思う。北周の臣としての庾信の事跡を詳しく研究することは、また唐詩の発展を深く理解することにも深く関わっている。私の庾信論の目的の一つは、この点の研究を進める基礎作業をすることにある。

ところで、この周弘正は、あの斉の仏教を好んだ周顒の孫に当たる。杜甫の詩にも、「庾信は哀しむこと久しと雖も／周顒は（仏教を）好んで忘れず」（『兜率寺に上る』詩）と、庾信と並べて言われるが、その周顒の血を引いて、周弘正も世に知られた博学な人物だった。梁の武帝や元帝の側で、国子博士として学問・文化上大きな功績を残しているから、同様の職務にあった同世代の庾肩吾、その子の信父子とも親しかったと思われる。周弘正には、「庾肩吾の道館に入るに和す詩」がある。また、彼の弟は周弘讓といい、建康時代の庾信に「周処士弘讓を尋ぬ」の詩

が伝わる（庾肩吾の説もあり）。いわば家族ぐるみの交流のあった周家と庾家だが、庾信はこの父親はとも年の離れた周弘正から、故郷の江南の情報を非常に懐かしく聴き、望郷の念を覚えたに違いない。その周弘正が、いよいよ江南へ帰任することとなった。その時の庾信の送別詩は次の通りである。

庾信「尚書・周弘正に別る」

長安の石橋の北で

扶風石橋北

また 函谷の古い関所の前で

函谷故関前

いよいよ 袂分かつ時

此中一分手

また再会するは

相逢知幾年

いつの日か

黄鶴一反顧

ああ その昔

徘徊応愴然

故郷に焦がれた 黄鶴は

自知悲不已

遙か 彼方を振り返り

徒勞減瑟絃

いたたまれず 辺りを

ウロウロ 徘徊するばかり

止むことない この悲しみよ

いっそ絃の数 減らそうか

けれど どうせ無駄なだけ

悲しみの 減るはずもなし

「尚書・周弘正を送る 二首」

其一

西北のさいはて 交河こうがにて

交河望合浦

南のさいはて 合浦くわうほを望み
東北のさいはて 玄菟げんとにて
南のさいはて 朱鸢しゆゑんを思う
いずれも どちらも
無期なる別れ
一体 どれだけ続くのやら
玄菟想朱鸢
共此無期別
知応復幾年

其二

別れの時が決まったら
急に せきたてるような 慌ただしさ
こう せわしければ
別れの涙も 落ちやせぬ
ただ城門の外で 愁うるばかり
異境の墳墓の 松の木を
一本 二本と 数えるばかり
異国の土となる この我か
離期定已促
別淚転無從
惟愁郭門外
応足数株松

「重ねて尚書・周弘正に別る」
本心に遠いよ 辺境の陽関は
万里の道が 続いてる
見たこともない たったの一人も
かの地から 帰ってきた者を
ただ 見るのは
黄河の辺りの 雁のみさ
陽関万里道
不見一人婦
惟有河辺雁
秋来南向飛

ああ 秋がきて
飛んで行くんだ あゝの南へ

「秋来たり、南向して飛ぶ」の句は、この周弘正と「重ねて別」れた季節を表したものと考えられるから、庾信は周弘正と保定二年秋に別れたのだらう。かくして、翌保定三年に、安成王・周弘正らは懐かしの陳に到着したのだった。

これらの庾信の送別詩は、周弘正を送る詩に託して、分断された世界の苦悩、南北に引き裂かれる悲しみや、異郷に客死する無念さを思うという内容になっている。この「送別詩（離別詩）」の史的展開については、松原朗氏に一連の研究があり¹³、六朝より盛唐に至るまでの、主たる変遷史が明らかにされている。ただ、我々の問題にしている庾信については、松原論文でも詳しい言及はなされていないので、ここで少し庾信のこの送別詩の意義を考えてみることにしよう。松原氏の離別詩の変遷史によれば、六朝離別詩の一つの頂点に位置するのは、梁の前中期の何遜だが、その後は閉塞感に陥って停滞してしまふ、という。

それを打破し、離別詩に新しい展望をもたらしたのが、右の庾信の詩だと思う。庾信の詩にいう、「無期別」「万里道」といったような、甚だしい時空間上の懸隔感、情感的にも、「相逢うこと、幾年なるかを知らん」と、終わりのない離別感を漂わせる。このようないわば最大級の強い生の感情を持った離別詩というのは、南北朝が別々に歩んでいた時代には見られなかったものだろう。南北の間で異質なものが激しく混ざりあい、過去と現在が錯綜し、古今の感慨が葛藤を繰り返し、新旧の価値観がもみ合う、そうした複雑な状況が渦巻く中で、庾信がそれに見合う斬新な言葉を懸命に欲した結果だといえよう。

ところで、庾信のこの送別詩のテーマは、すぐ察せられるように、杜

甫の詩想に深い影響を与えていることが一目瞭然である。杜甫の作中に濃厚な個性、戦乱、離別、異郷・流離感、および南北の遠隔的情感といった詩風の、一つの大きな原点、それが庾信文学なのである。既に別稿で述べたように¹⁴、「重ねて尚書・周弘正に別る」は、杜甫の「帰雁」詩において、五絶の形式から、語彙のほとんどの用例、押韻に至るまで、ほぼ完全に換骨奪胎されたものである。杜甫は安史の乱後、庾信の中に、当代の唐王朝や自己の状況と本質的に重なるものを発見、共感の度合いを深めていったが、庾信のこうした作品との濃密な響き合いを、深く経験したこと。——これが、杜甫の庾信像を決定づけるとともに、杜甫にとっての庾信が、自己とほとんど一体化し、また美化されていく要因にもなったと考えられる。

注

- (1) 拙稿「北周・孝閔帝期の庾信」(上)『愛媛大学教育学部紀要』27-1 94、「同」(下)『同』27-2 95を参照のこと。
- (2) 注(1)を参照。
- (3) 王仲犇『北周六典』(中華書局 79)。
- (4) 『周書』卷38、『北史』卷15元偉伝にも、庾信にこの詩を贈られ、「辞人に重んぜらる所と為ること此くの如し」と記される。
- (5) 長部悦宏「元氏研究」北朝隋唐時代における鮮卑族の文人士大夫化の一軌跡(礪波護編『中国中世の文物』京都大学文研 93)を参照。
- (6) これについては、谷川道雄『中国中世社会と共同体』(国書刊行会 76)「西魏『六条詔書』における士大夫倫理」があるのを参照。
- (7) 拙稿「北周・武帝期の庾信」(二)『愛媛大学教育学部紀要』29-1 96を参照。
- (8) 拙稿「北周・明帝期の庾信」(下)『愛媛大学教育学部紀要』28-2 96を参照。

- (9) 藤田純子「唐代の史学―前代史修撰と国史編纂の間―」『史窓』33 京都女子大 75、浅見直一郎「中国の正史編纂―唐朝初期の編纂事業を中心に―」『京都橘女子大 研究紀要』19 92 が、『周書』の編纂について論ずるのを参照されたい。
- (10) 注(8)に同じ。
- (11) 内田吟風「北周の律令格式について」『北アジア史研究―鮮卑柔然突厥篇―』同朋舎 75 を参照。
- (12) 興膳宏『庾信』(集英社 83)等を参照のこと。
- (13) 早いものでは、山崎宏「隋朝官僚の性格」『史学研究』6 東京教育大 56 が、この点について詳細に明らかにしている。また吉岡真「八世紀前半における唐朝官僚機構の人的構成」『史学研究』153 広島史学会 81、同「隋・唐前期における支配階層」『史学研究』155 82 が、この問題を発展的に論じている。「八世紀前半における」論文の注記には、この方面の研究史・研究文献について、詳細な紹介があり有益。
- (14) 松原朗「六朝期における離別詩の形成」(上)、(中)、(下) 一、(下) 一、二、(下) 一三『中国詩文論叢』第九―十二集、十四集 早稲田大 90―93、95 を参照。
- (15) 拙稿「成都期における杜詩と庾信文学」『日本中国学会報』37 85 第三・四章で言及した通りである。ことに、庾信「重ねて周尚書に別る」詩を、杜甫がいかに受容したかについては、一三〇頁を見られたい。

(続く)

(一九九六年九月三〇日受理)